

皇位繼承の歴史（三）「南北朝の開闢」

高田 友

一二四二年、87四條天皇俄かに崩御あらせらる。史上唯一の事故死せられたる天皇なりき。すなはち、御所の廊下に滑石を塗り、女官の顛倒して蒼惶たる様を御覧じて入興じゆきやうあらせられたるが、大自ら滑りたふれ、脳震盪を起して死に至らせたまふ。愚昧なる帝にあらせたまひしかと疑ふなかれ。愚昧にてあらせられしにはあらず、只幼くおはしまししなり。時に十二歳。

この年、間を置かずして、鎌倉にては北條泰時卒す。いづれもいづれも二年前に隱岐にて崩御あらせられし82後鳥羽院の御崇りと傳へらる。院は御遺言して「朕、恨みを吞みて崩ずるといへども、ゆめ崇りを爲すことあらじ。然しからばすなはち、則、崇りを避けんが爲に諡号に『德』の字な附せそ」とおほせらる。然しかりしかうして、而、朝廷にては、なほ崇りを恐れ、「顯徳院」の諡号を奉る。（當初は一時「隱岐院」を奉る）然るに今崇りあり。於是耶ここににおいてか、京都にては贈り名惡しきがゆゑなりと判じて、改めて「後鳥羽院」とぞ申し上げる。

さて、主上崩御あらせられ、新帝の選定焦眉の急たり。四條天皇は傍系より入らせたまひたる御父86後堀河帝に次ぐ二代目。今天折あらせらるるも、近親に男子なし。先の王朝・後鳥羽院の皇子にて登極あらせられたるは83土御門帝と84順徳帝。土御門院の皇子に邦仁王（二十三歳）、順徳院の皇子に忠成王（二十二歳）あり。忠成王幕府の覺え尋常なる九條道家の甥。（因みに承久の變にて廢せられ給ひし85仲恭天皇も道家の甥）然して、道家は將軍賴經の父なれば、朝廷の台閣にてはすでに皇位は忠成王にと衆議一決せり。

報鎌倉に傳はるや、執權北條泰時これを阻止せんとて、安達義景をして上洛せしむ。順徳院は幕府に謀叛を企て給ひける犯罪人なり。逆臣にあらで逆君と呼ぶべしや。今、その皇子を一天萬乗の君に据ゑ奉らんか、必ずや院の佐渡より御歸洛ありて、治天の君とならせたまふべし。引き換へて、土御門院は土佐阿波に遷幸あらせたまふとはいふ條、承久の變に關與し給はざるは幕府もよく知る所なり。

加之しかのみならず、土御門院はすでに鬼籍に入らせたまへれど、順徳院はいまだ御在世。されば、自然のこと出來せんを避けんがためにも、邦仁王こそ十善の主たるべけれど、容喙あるじせんとしたるなり。

義景、一旦出立して後戻り來り、泰時に問うて曰く、「都にて既に忠成王踐祚あらせられ給ひて畢んぬること有之候はば、如何にか仕り候べき」と。泰時答へて曰く、「仔細なし。降し奉れ」と。

承久の變の折には、義時、泰時に向ひて、「主上御自ら御出馬有之候ひけるときは、弓切り折りて降參せずんばあるべからず」と申しけり。然るに今、泰時の朝議を憚る所なきは、幕府の威すでに朝廷を凌ぎたるの證なり。

かくして、邦仁王祖宗の神器を承繼あらせたまふ。これすなはち後嵯峨天皇にておはします。半年の後、忠成王の御父・順徳院、佐渡にて崩御あらせたまふ。一説には、歸洛の望み絶えたるがゆゑに自裁したまへるなりと。眞ならば、史上只一人の自ら死を選びたまひける帝なり。

後嵯峨登極の始めは、九條道家禪閣（出家したる太閤／太閤とは引退後の關白の謂ひ）として權勢を揮ひたれども、一二四六年、息賴經（四代將軍）、將軍を廢せらるるに連坐して失脚す。をりしも後嵯峨天皇は皇子・久仁親王に讓位あらせらる。すなはち89後深草天皇（四歳／後嵯峨は二十七歳）。後嵯峨は治天の君となりて、院政を執行し給ふ。

後嵯峨は久仁親王よりも弟宮恆仁親王を鍾愛せられ、一二五九年、久仁（後深草）に退位を強ひ、恆仁を立てて90龜山天皇と爲したまふ。此の間、後嵯峨院の治天たるは言ふに及ばず。

已而、一二五二年、後嵯峨庶長子宗尊親王（十一歳）宮將軍として鎌倉に迎へられ給ふ。父と子にて東西の主を務めたまひけるは芽出度こと限りなければ、悲しむべし、天津日嗣の寶位はすでに武家の軍門に下りて末世の様を呈す。宜なるかな、二十年の後に外患の憂へに遭ふの先驅けなりしとは。

一二七二年、後嵯峨院兩御あらせられたまひしが、臨終のときにも治天の君を定めたまはず。また次第を辿れば、後深草皇子熙仁親王の皇太子たるべきを、さならずして、龜山皇子世仁親王に皇太子の御印なる壺切の劔を賜はる。

一二七四年、すなはち元寇の年（文永の役）に、世仁親王に御讓位のことあり、すなはち91後宇多天皇にておはします。是に於て、後深草院は、其の系統の皇統より外れたるを夢み、落飾あらせられんとす。執權時宗拱手するに堪へず、幹旋して、後宇多の皇太子に後深草皇子熙仁親王を立て奉る。後の92伏見天皇たる熙仁皇太子は後宇多天皇の二歳年長なり。

かくして、これより後は兩統迭立慣例となりて、皇統は分裂し、後深草院の裔を持明院統、龜山院の裔を大覺寺統とぞ申し上ぐる。

後宇多の皇子に後醍醐出で、後醍醐の皇子に後村上あらせたまふ。不可思議なるかな、平安初期に宇多の皇子に醍醐、醍醐の皇子に村上あり。後醍醐はいにしへの醍醐帝を尊崇すること懇篤にして、自ら追號を後醍醐とすべく遺言あらせられたり。さすれば、後宇多の追號を選定せられたるも後醍醐ならんか。

一方、後嵯峨の皇子に後深草あり。抑々、「深草」とは平安初期の仁明天皇の異名なり。しかうして、仁明天皇は嵯峨天皇の皇子なり。父と子たるを以て、これを追號としたるにあらずや。ただ、不可思議なるは、後嵯峨の「嵯峨」は兩御の地、後深草の「深草」は御陵の地の名なり。しからばすなはち父子の名たるは偶然の一致なるか。あるいは殊更に御陵の御爲に深草の地を選びたるか。

なほ、「聖武」「天武」など、古代の天皇の「贈り名」にして、その功績を讃へたる、あるいは「崇徳」「安德」の如く不幸の帝の神靈を安んじたてまつらんが爲に附したるは「謚號」と申す。一方、「醍醐」「三條」の如く地名を附したるは「追號」。

さらに、「後嵯峨」「後桃園」の如く、「後」を附したるは「加後號」「加後號」は悉く「謚號」にはあらず、「追號」なり。

中世以降、謚号にあらで追號が通例となりたれど、江戸期に伏見宮家より入りて、大統を嗣ぎたまひける光格天皇より以降、謚號復活す。但し、大正の御代に、謚號追號の別を廢して、「天皇號」と呼稱するに定まりたり。

追記するに、「大覺寺統」と「南朝」は同義にはあらず。「持明院統」と「北朝」は同義にはあらず。「南朝・北朝」とは、同時期に兩帝立ちたまひけるの時期を申す。すなはち、後醍醐隱岐に遷幸、光嚴即位あらせたまひてより後を「南北朝」といふ。後宇多・伏見などの御代には「大覺寺統」なれど南朝にはあらず、「持明院統」なれども北朝にはあざりき。

さらに追記するに、内裏を現在の御所の地に遷したまひしは北朝第一代光嚴天皇なり。それより以前は西の方京都市街中央部に位置したりしとぞ。